

論文

対人関係に困難さがみられる保育実習生に関する全国調査

A Nationwide Survey on Guidance for Child Daycare Interns with Difficulties in Interpersonal Relationships

服部 伸一*¹, 井上 寿美*², 廣 陽子*¹, 半田 結*³

要約: 本研究では、対人関係に困難さがみられる学生の状況について把握するため、全国保育士養成協議会に加盟する 535 校、607 養成課程の保育実習指導の主担当者を対象にアンケート調査を行い、162 通の回答が得られた (回答率 30.8%)。主な結果を以下に示す。

- 1) 調査対象者の所属は、「専門学校」(22.2%)、「短期大学」(36.4%)、「大学」(40.7%)、「その他」(0.6%)であった。地域別では、「北海道」(3.7%)、「東北」(8.6%)、「関東」(27.2%)、「中部」(19.8%)、「近畿」(20.4%)、「中四国」(14.2%)、「九州」(6.2%)であった。
- 2) 過去 3 年以内に、勤務していた／勤務している養成校において、対人関係に困難さがみられ、通常の指導では指導が行き届かないと感じるような実習生は、「1 人」(8.0%)、「2 人」「3 人」「4 人」(各 17.3%)、「5 人以上」(38.3%)、「無回答」(1.9%)という結果であった。
- 3) 対象となる実習生について、通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じた点について、学内の指導では、「複数の指示に対応できない」、「説明の意図が通じない」、「提出物が出ずに滞る」、「指導案や記録の書き方がわからない」、「コミュニケーションがとりづらい」、「連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない」と回答した割合が 80%程度と高く、実習先施設での様子ともほぼ共通していた。子どもとの関係においては、「子どもの言いなりになる」、「子どものペースを考えずに自分のペースで行動する」が 60%を超える回答率を示していた。
- 4) 最も指導が困難であった A さんとの面談は 94.4%が行っていた。面談の内容は「実習での特別な配慮」(56.9%)、「資格取得」(51.6%)、「進路選択」(45.8%)などであった。A さんとの保護者との面談については、約半数(46.9%)が実施していた。
- 5) A さんの具体例とエピソードについて、「質的記述的研究法」を用いてコード化、カテゴリ化したところ、453 のセグメントから、76 のコード、16 のカテゴリに整理・分類することができた。

Key Words: 対人関係, 困難さ, 保育学生, 実習指導, 実行機能

I 目的

わが国の対人援助職養成に関わる実習指導において、対人関係に困難さがみられる学生に関する研究は、少しずつ増加してはいるが未だ少ないのが現状である。看護師志望学生の臨地実習(中尾ほか 2015; 山下・徳本 2016)や作業療法士志望学生の臨床実習(佐々木・八田 2010)、社会福祉士志望学生の社会福祉援助技術現場実習(浅原ほか 2008)、教員志望学生の特別支援学校にお

ける教育実習(長沢 2016; 二通 2016)、保育士志望学生の保育実習(三澤 2017; 井上ほか 2019; 廣ほか 2020; 服部ほか 2020)のみである。

2022(令和 4)年 3 月、大阪教育大学は、文部科学省「教師の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の一環として、「教育実習に参加する障害のある学生に対する合理的配慮の在り方の検討に関する調査研究」を報告書にまとめるとともに、「障がいのある学生の教育実習における合理的配慮に関する対応マニュアルとチェックリスト」を作成した。

対応マニュアルでは、障がいのある学生を対象とした教育実習について、実習前の面談のあり方、実習先の選定段階での留意事項、実習先への情報提供や調整のあり方、大学との連絡体制のあり方、実習後の成果や課題の振り返りの機会のあり方、障害学生支援専門部署と実習

2022 年 11 月 15 日受付 / 2023 年 1 月 11 日受理

*¹ HATTORI Shinichi
HIROSHI Yoko
関西福祉大学 教育学部

*² INOUE Hisami
大阪大谷大学 教育学部

*³ HANDA Musubi
兵庫大学 短期大学部

担当者部署の連携の在り方について、配慮すべき点を詳述している。

また、対応マニュアルに準じた「チェックリスト」には、学内の準備（書類、面談、選定）、実習校とともに行う準備（パニックになった際の対応、情報の伝え方、欠席や遅刻の対応の取り決め、提出物の提出方法、遅延の場合の取り決め）、実習後の振り返り（学生自身の気づき）など、具体的な手順が示されている。身体障害、精神障害のみならず、近年、増加傾向にあるとされる発達障害についても同様である。

保育者養成における実習に関しては、対人関係に困難さがみられる学生の状況や指導に関わる悩みについて、これまで十分に明らかにされておらず、個々の養成校の実習担当者が手探りで対応を行ってきた。保育士不足が叫ばれる昨今、対人関係に困難さがみられる学生への実習指導は、保育者養成の重要な課題である。

本研究では、対人関係に困難さがみられる学生の状況について、全国保育士養成協議会に加盟する養成校の実習担当教員へのアンケート調査によって把握し、配慮を必要とする学生への実習指導のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

なお、本研究において用いる「対人関係に困難さがみられる学生」というのは、保育実習の担当者が指導する上で、通常の指導では行き届きにくい特別な配慮を要する学生、中でも対人関係において困難がある学生のことである。

II 方法

2021（令和3）年10～12月に、全国保育士養成協議会に加盟する大学・短期大学・専門学校535校、607養成課程の保育実習指導の主担当者を対象に、郵送法によるアンケート調査を実施した。その結果、162通の回答があり、回答率は30.8%であった。

調査内容は、養成機関の属性、対象となる学生の課題、サポート体制、指導困難学生の人数とそれらの学生の状況、指導困難さの内容、指導困難さが生じた場合の養成校としての対応、その後あるいは現在の状況（留年、卒業、退学、資格取得）及び自由記述欄で構成した。資料の数量部分については、質問項目ごとの単純集計を行った。

通常の指導では指導が行き届きにくい実習生の姿として、最も指導が困難であった1名の学生（以下、「Aさん」とする）については、具体例とエピソードを自由記述形式で回答してもらった。このAさんの具体例とエピソードは、「質的記述的研究法」を用いて、テキストを

切片化してセグメントを切り出し、それぞれのセグメントにコードを付し、カテゴリ化を行った。なお、コードは、実習指導者に映る「見た目」の姿、カテゴリは背後にある「本人のしんどさ」に着目して命名した。

本研究は、関西福祉大学教育学部研究倫理委員会の承認（承認番号3-0714号）を得るとともに、「日本保育学会倫理綱領」を遵守して実施した。

III 結果

1) 調査対象者の属性

調査対象者の属性として、表1に学校種、表2に国公立の別、また、表3に所属ブロックを示した。調査対象者の所属は、「専門学校」(36名, 22.2%)、「短期大学」(59名, 36.4%)、「大学」(66名, 40.7%)、「その他」(1名, 0.6%)であった。国公立の別では、「国立」(1名, 0.6%)、「公立」(6名, 3.7%)、「私立」(154名, 95.1%)、「その他」(1名, 0.6%)となっていた。さらに、地域別では、「北海道」(6名, 3.7%)、「東北」(14名, 8.6%)、「関東」(44名, 27.2%)、「中部」(32名, 19.8%)、「近畿」(33名, 20.4%)、「中四国」(23名, 14.2%)、「九州」(10名, 6.2%)であった。

なお、養成校教員としての経験年数は、平均11.5±7.6年(N=162名)、保育者としての経験年数については、平均11.7±13.6年(N=137名)であった。

表1 調査対象者の所属（学校種）

項目	全体 (N=162)	
	人数	%
専門学校	36	22.2
短期大学	59	36.4
大学	66	40.7
その他	1	0.6

表2 調査対象者の所属（国公立の別）

項目	全体 (N=162)	
	人数	%
国立	1	0.6
公立	6	3.7
私立	154	95.1
その他	1	0.6

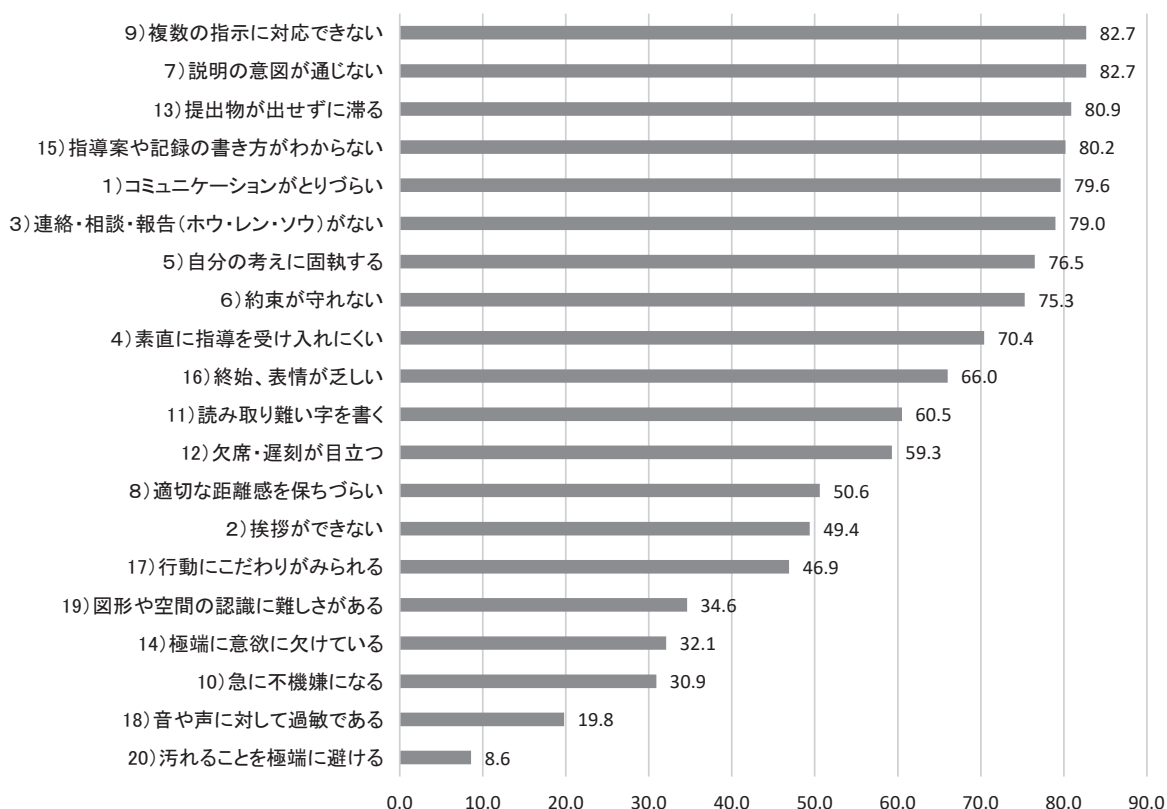


図 1：学内の実習指導での様子 (%，複数回答，N=162)

表 3 調査対象者の所属ブロック

項目	全体 (N=162)	
	人数	%
北海道	6	3.7
東北	14	8.6
関東	44	27.2
中部	32	19.8
近畿	33	20.4
中四国	23	14.2
九州	10	6.2

表 4 過去 3 年以内に、勤務されていた／勤務されている養成校において、対人関係に困難さがみられ、通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じるような実習生の人数

項目	全体 (N=162)	
	人数	%
1 人	13	8.0
2 人	28	17.3
3 人	28	17.3
4 人	28	17.3
5 人以上	62	38.3
無回答	3	1.9

2) 過去 3 年以内に、勤務していた／勤務している養成校において、対人関係に困難さがみられ、通常の指導では指導が行き届かないと感じるような実習生の数
過去 3 年以内に、勤務していた／勤務している養成校において、対人関係に困難さがみられ、通常の指導では指導が行き届かないと感じるような実習生の数について、表 4 に示した。

「1 人」(13 名, 8.0%)、「2 人」「3 人」「4 人」(各 28 名, 17.3%)、「5 人以上」(62 名, 38.3%)、「無回答」(3 名, 1.9%) という結果であった。

3) 対象となる実習生について、通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じた点

対象となる実習生について、通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じた点について、「学内の実習指導における様子」を表 5 - 1 及び図 1 に示した。「複数の指示に対応できない」「説明の意図が通じない」(各 82.7%)、「提出物が出せずに滞る」(80.9%)、「指導案や記

録の書き方がわからない」(80.2%),「コミュニケーションがとりづらい」(79.6%),「連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない」(79.0%)が約80%となり,高い割合であった。

表5-1 対象となる実習生に関して, 次のような点において, 通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じたことはありますか。

(1) 学内の実習指導における様子(「ある」と答えた人, 複数回答)

質問項目	全体 (N=162)	
	人数	%
1) コミュニケーションがとりづらい	129	79.6
2) 挨拶ができない	80	49.4
3) 連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない	128	79.0
4) 素直に指導を受け入れにくい	114	70.4
5) 自分の考えに固執する	124	76.5
6) 約束が守れない	122	75.3
7) 説明の意図が通じない	134	82.7
8) 適切な距離感を保ちづらい	82	50.6
9) 複数の指示に対応できない	134	82.7
10) 急に不機嫌になる	50	30.9
11) 読み取り難い字を書く	98	60.5
12) 欠席・遅刻が目立つ	96	59.3
13) 提出物が出せずに滞る	131	80.9
14) 極端に意欲に欠けている	52	32.1
15) 指導案や記録の書き方がわからない	130	80.2
16) 終始、表情が乏しい	107	66.0
17) 行動にこだわりがみられる	76	46.9
18) 音や声に対して過敏である	32	19.8
19) 図形や空間の認識に難しさがある	56	34.6
20) 汚れることを極端に避ける	14	8.6

前項と同様の質問について, 「実習先施設における様子」を表5-2及び図2に示した。「説明の意図が通じない」(81.5%),「複数の指示に対応できない」(71.6%),「指導案や記録の書き方がわからない」(77.2%),「連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない」「コミュニケーションがとりづらい」(各74.1%),「提出物が出せずに滞る」(71.6%)が上位となり, 学内の実習指導における様子とほぼ共通の項目が挙げられていた。子どもとの関係においては, 「子どもの言いなりになる」(66.7%), 「子どものペースを考えずに自分のペースで行動する」(63.6%)が高い回答率を示した。

表5-2 対象となる実習生に関して, 次のような点において, 通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じたことはありますか。

(2) 実習先施設における様子

(実習訪問の際に見た, あるいは実習先施設から伝えられた様子。「ある」と答えた人, 複数回答)

質問項目	全体 (N=162)	
	人数	%
1) コミュニケーションがとりづらい	120	74.1
2) 挨拶ができない	85	52.5
3) 連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない	120	74.1
4) 素直に指導を受け入れにくい	102	63.0
5) 自分の考えに固執する	97	59.9
6) 約束が守れない	95	58.6
7) 説明の意図が通じない	132	81.5
8) 適切な距離感を保ちづらい	68	42.0
9) 複数の指示に対応できない	116	71.6
10) 急に不機嫌になる	23	14.2
11) 読み取り難い字を書く	98	60.5
12) 欠席・遅刻が目立つ	47	29.0
13) 提出物が出せずに滞る	116	71.6
14) 極端に意欲に欠けている	52	32.1
15) 指導案や記録の書き方がわからない	125	77.2
16) 終始、表情が乏しい	100	61.7
17) 行動にこだわりがみられる	56	34.6
18) 音や声に対して過敏である	24	14.8
19) 子どもと適切な距離感を保ちづらい	46	28.4
20) 子どもへのコミュニケーションが成立しづらい	11	6.8
21) 複数の子どもから話しかけられるとうまく対応できない	84	51.9
22) 子どものペースを考えずに自分のペースで行動する	103	63.6
23) 子どもの言いなりになる	108	66.7

4) Aさん本人との面談

Aさん本人との面談の実施について, 表6-1に示した。「行った」(153名, 94.4%), 「行かなかった」「できなかった」「無回答・無効」がそれぞれ3名(1.9%)であった。また, Aさん本人との面談の内容について, 表6-2に示した。「実習での特別な配慮」(76名, 46.9%), 「資格取得」(79名, 51.6%), 「進路選択」(70名, 45.8%), 「その他」(24名, 15.7%)であった。

表6-1 Aさん本人との面談の実施

項目	全体 (N=162)	
	人数	%
行った	153	94.4
行かなかった	3	1.9
できなかった	3	1.9
無回答・無効	3	1.9

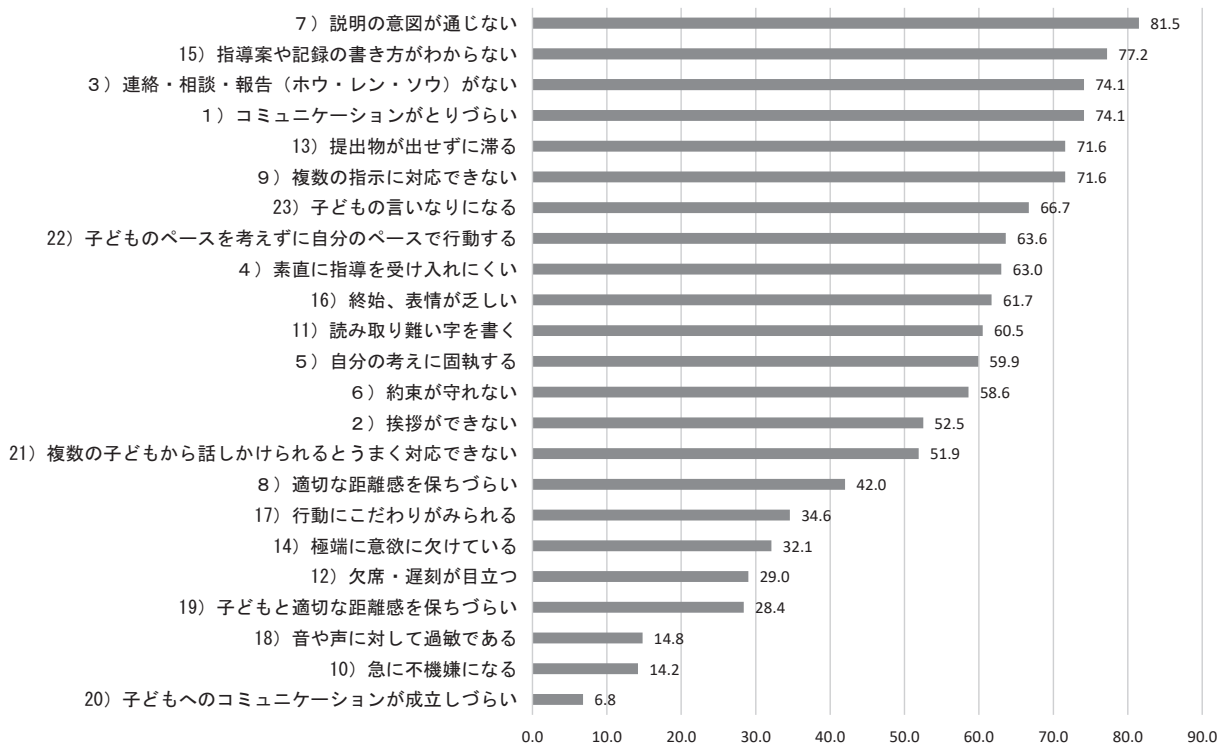


図2：実習先施設での様子(%, 複数回答, N=162)

表6-2 Aさん本人との面談の内容(複数回答)

項目	全体(N=153)	
	人数	%
実習での特別な配慮	87	56.9
資格取得	79	51.6
進路選択	70	45.8
その他	24	15.7

表7-2 Aさんの保護者との面談の内容(複数回答)

項目	全体(N=76)	
	人数	%
実習での特別な配慮	33	43.4
資格取得	52	68.4
進路選択	45	59.2
その他	10	13.2

5) Aさんの保護者との面談

Aさんの保護者との面談の実施について、表7-1に示した。「行った」(76名, 46.9%), 「行わなかった」(70名, 43.2%), 「できなかった」(11名, 6.8%), 「無回答・無効」(5名, 3.1%)であった。また、Aさんの保護者との面談の内容について、表7-2に示した。「実習での特別な配慮」(33名, 43.4%), 「資格取得」(52名, 68.4%), 「進路選択」(45名, 59.2%), 「その他」(10名, 13.2%)であった。

表7-1 Aさんの保護者との面談の実施

項目	全体(N=162)	
	人数	%
行った	76	46.9
行わなかった	70	43.2
できなかった	11	6.8
無回答・無効	5	3.1

6) Aさんに対する面談以外の対応(表8)

Aさんに対する面談以外の対応について、表8に示した。「学生相談室との連携」(42名, 25.3%), 「障害学生支援部署との連携」(14名, 8.6%), 「学部・学科教員との情報共有」(144名, 88.9%), 「実習先施設との情報共有」(114名, 70.4%), 「学外の相談機関等との連携」(11名, 6.8%), 「その他」(6名, 3.7%)という結果であった。

表8 Aさんに対する面談以外の対応(複数回答)

項目	全体(N=162)	
	人数	%
学生相談室との連携	41	25.3
障害学生支援部署との連携	14	8.6
学部・学科教員との情報共有	144	88.9
実習先施設との情報共有	114	70.4
学外の相談機関等との連携	11	6.8
その他	6	3.7
面接以外の対応なし	3	1.9

7) Aさんの状況

Aさんのその後、または現在の状況について、表9-1に示した。回答のあった146名のうち、「在学中(留年含む)」(87名, 59.6%), 「すでに卒業」(50名, 34.2%), 「退学した」(9名, 6.2%)となっていた。

また、Aさんの資格・免許の取得について、表9-2に示した。在学中と答えた87名のうち、保育士については、「見込みあり」45名、「見込みなし」18名、不明24名、幼稚園教諭については、「見込みあり」32名、「見込みなし」25名、不明・回答なし30名となっていた。一方、すでに卒業したと答えた者51名のうち、保育士は「取得」30名、「取得なし」21名、幼稚園教諭では、「取得」23名、「取得なし」21名、不明・回答なしは7名であった。

表9-1 Aさんのその後、または現在の状況

項目	全体 (N=146)	
	人数	%
在学中 (留年含む)	87	59.6
すでに卒業	50	34.2
退学した	9	6.2

表9-2 Aさんの資格・免許の取得

項目	保育士	幼稚園教諭
在学中 87名	見込みあり45名, 見込みなし18名, 不明24名	見込みあり32名, 見込みなし25名, 不明・回答なし30名
すでに 卒業した 51名	取得30名, 取得なし21名	取得23名, 取得なし21名, 不明・回答なし7名

8) Aさんの具体例とエピソード

Aさんの具体例とエピソードについて、「質的記述的研究法」を用いてコード化、カテゴリ化した結果を、表10に示した。453のセグメントから、76のコード、16のカテゴリに整理・分類することができた。

16のカテゴリの内訳(数字はコード数を示す)は、「自分の思いを伝えるのが苦手である」(3), 「記憶が点で存在し時系列でつなげるのが苦手である」(10), 「他者の思いを想像するのが苦手である」(5), 「複数の身体機能を使う協応動作が苦手である」(5), 「複数の情報を分けて整理するのが苦手である」(3), 「計画的にものごとを進めるのが苦手である」(4), 「自分の感情をコントロールするのが苦手である」(5), 「他者のことを意識するのが苦手である」(3), 「イメージを広げて考えるのが苦手である」(6), 「読み書き計算など特定の分野だけが苦手

である」(6), 「応答的に他者と関わるのが苦手である」(8), 「他者を過剰に意識してしまう」(5), 「感覚刺激に対して過剰に反応してしまう」(2), 「時間や空間を適切に認識するのが苦手である」(4), 「自己の思いに固執してしまう」(5), 「一つの対象に注意を向け続けるのが苦手である」(2)となった。

IV 考察

一般に、発達障害の特性を持つ学生の姿として、「周りの空気が読めない」、「相手の気持ちに配慮できない」、「こだわりが強い」、「同時に2つのことがうまくできない」など、対人関係上の問題点が挙げられる。対人援助職の養成においては、実習でのコミュニケーションのあり方、援助技術、実習記録、他者との協働・協力などの場面で、様々な困難を生じることが推測される。近年、「発達障害傾向にある看護学生ガイドライン」が作成され、看護学生によく見られる特徴やつまづきが明らかとなり、学習場面ごとの「実行を支える支援」についても検討されている(安酸ら2021;北川2021)。

本研究の結果をみると、過去3年以内に、対人関係に困難さがみられ、通常の指導では指導が行き届かないと感じるような実習生の数について、「2人」以上という回答が80%を超え、決して珍しい存在ではないことが明らかとなった。少し時間をかけて個別指導をすれば改善が見込める学生とは異なる特別な配慮を要する学生である。対象となる学生の実習指導での様子を尋ねたところ、「複数の指示に対応できない」、「説明の意図が通じない」、「提出物が出ずに滞る」、「指導案や記録の書き方がわからない」、「コミュニケーションがとりづらい」、「連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない」と回答した割合が80%程度と高く、実習先施設での様子ともほぼ共通していた。子どもとの関係においては、「子どもの言いなりになる」、「子どものペースを考えずに自分のペースで行動する」が60%を超える回答率を示していた。

保育士に求められる専門性の一つに、子どもどうしの関わりや子どもと保護者の関わりを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく「関係構築の知識・技術」がある。対象となる学生にとっては、子どもをはじめ、周囲とのさりげない気持ちのやり取りや意思疎通が極めて難しいことが推察される。

最も指導が困難であったAさんとの面談については、94.4%の養成校教員が行っていた。面談の内容は「実習

表10 Aさんの具体例とエピソードの分類

番号	カテゴリ	コード	セグメント
1	自分の思いを伝えるのが苦手である	声を出さず首を振るだけで応答する	2
		意思表示が曖昧である	1
		表情が乏しい	7
2	記憶が点で存在し時系列でつなげるのが苦手である	借りたものを返却しない	3
		記憶が定着していない	4
		自己課題が認識できていない	28
		事実と異なることを平気で言ったり書いたりする	7
		指導を受けても改善できていない	30
		その場しのぎで応答する	2
		反省の態度に欠ける	6
		不注意なミスをする	6
		報告・連絡・相談ができない	9
		時系列で整理ができず日誌・指導案が書けない	2
3	他者の思いを想像するのが苦手である	思ったことをそのまま言う	6
		子どもの思いをくみとれない	3
		ものごとを自分中心に考える	5
		子どもの思いをくみとれず日誌・指導案が書けない	3
		指導の意図をくみとれない	6
4	複数の身体機能を使う協応動作が苦手である	保育技能に著しく欠ける	2
		体の使い方がぎこちない	1
		簡単な事務作業ができない	4
		書き物のバランスがとれない	2
		読みとりにくい文字を書く	10
5	複数の情報を分けて整理するのが苦手である	整理整頓ができない	5
		同時に複数の情報に対応できない	6
		項目記載内容ごとに分けられず日誌・指導案が書けない	1
6	計画的にものごとを進めるのが苦手である	作業に著しく時間がかかる	1
		提出期限を守れない	24
		見通しをもって行動できない	3
		自分で考えて動けない	13
7	自分の感情をコントロールするのが苦手である	指導に対して感情的になる	4
		指導を素直に受け入れない	14
		他者に高圧的な態度をとる	5
		感情を抑えきれない	4
		不都合なことをかいくぐろうとする	11
8	他者のことを意識するのが苦手である	子どもの思いをくみるとはどのようなことなのかわからない	5
		身勝手な行動をする	32
		他者との距離感が不適切である	4
9	イメージを広げて考えるのが苦手である	過度の不安を抱く	6
		子どもの安全に配慮できない	5
		子どもの姿が想像できない	2
		何とかなると思っている	2
		変化・変更にうまく対応できない	5
		子どもの姿がイメージできず日誌・指導案が書けない	3
10	読み書き計算など特定の分野だけが苦手である	簡単な計算ができない	1
		誤字脱字が多い	3
		文章を読んで理解するのが難しい	2
		極端にポイントをつかんで読む・書く・聞く・話すができない	6
		特に理由はわからないが日誌・指導案が書けない	5
		文字・文章を書くことが難しい	9
11	応答的に他者と関わるのが苦手である	非対面のコミュニケーションを求める	1
		グループ活動に参加できない	7
		子どもとかかわれない	12
		コミュニケーションがうまくとれない	6
		対人関係がうまく築けない	7
		たわいないコミュニケーションが難しい	6
		日常的なコミュニケーションが難しい	10
		場をわきまえて行動できない	7

番号	カテゴリ	コード	セグメント
12	他者を過剰に意識してしまう	個別の指導を要求する	1
		遅刻・欠席が多い	4
		対面授業への出席が難しい	3
		人の中にいることができない	3
		目線が合わない	2
13	感覚刺激に対して過敏に反応してしまう	感覚刺激に過敏である	5
		被害感情を抱きやすい	3
14	時間や空間を適切に認識するのが苦手である	時間や距離の感覚がずれている	3
		左右の識別が難しい	1
		図が書けない	1
		人の顔が認識できない	1
15	自分の思いに固執してしまう	こだわりが強い	10
		1つのことに集中すると他が見えない	4
		自分を正当化する	9
		他者に責任を転嫁する	5
		特定の子どもに密接にかかわる	6
16	1つの対象に注意を向け続けるのが苦手である	集中力に欠ける	2
		全体に対する指導では理解できない	4
合計数		76	453

での特別な配慮」(56.9%)が最も多く、次いで「資格取得」(51.6%)、「進路選択」(45.8%)などであった。実習は授業であるので、合理的配慮が必要であることを踏まえると、実習での特別な配慮については、大いに改善の余地があると思われる。

一方、Aさんの資格・免許の取得について、Aさんが在学中の場合、養成校の教員が見込みありと回答する割合は、幼稚園教諭免許より保育士資格の方が高くなっていった。Aさんがすでに卒業している場合も、実際に取得した資格も同様の結果であった。幼稚園教諭に比し、保育士資格の方が取得単位数は多くなるものの、卒業後の汎用性の広さを理由として本人や保護者が保育士資格の取得を強く希望する傾向にあるのではないかと考えられる。

本研究では、Aさんの具体例とエピソードに基づいて、「質的記述的研究法」を用いて慎重に議論を重ね、コード化、カテゴリ化を試みた。その結果、453のセグメントから、76のコード、16のカテゴリに整理・分類することができた。コードは、実習指導者に映る「見た目」の姿、カテゴリは背後にある「本人のしんどさ」に着目して命名したところ、課題として指摘される様々な事象には、通常の指導の範囲では改善が難しい「特性」が存在することが示唆された。

以上、対人関係に困難さがみられる保育学生の状況について、調査結果の概要を示した。特に、Aさんの具体例とエピソードから、カテゴリ・コード化を行い、全体的な傾向や特徴を数量的に把握することができた。同じ

実習記録が書けないという記述があったとしても、「子どもの思いを汲み取れない」「子どもの姿がイメージできない」など、その背景には様々な理由が存在する。実習生の見た目のできなさは、本人の辛さ(困難感)の表れでもある。今後は、こうした本人の視点からさらに詳細な分析を加えていく予定である。

V まとめ

本研究では、対人関係に困難さがみられる学生の状況について把握するため、全国保育士養成協議会に加盟する535校、607養成課程の保育実習指導の主担当者を対象にアンケート調査を行い、162通の回答が得られた(回答率30.8%)。主な結果を以下に示す。

1) 調査対象者の所属は、「専門学校」(22.2%)、「短期大学」(36.4%)、「大学」(40.7%)、「その他」(0.6%)であった。地域別では、「北海道」(3.7%)、「東北」(8.6%)、「関東」(27.2%)、「中部」(19.8%)、「近畿」(20.4%)、「中四国」(14.2%)、「九州」(6.2%)であった。

2) 過去3年以内に、勤務していた／勤務している養成校において、対人関係に困難さがみられ、通常の指導では指導が行き届かないと感じるような実習生は、「1人」(8.0%)、「2人」(17.3%)、「3人」(17.3%)、「4人」(17.3%)、「5人以上」(38.3%)、「無回答」(1.9%)という結果であった。

3) 対象となる実習生について、通常の実習指導では指導が行き届きにくいと感じた点について、学内の指導では、「複数の指示に対応できない」、「説明の意図が通じない」、「提出物が出ずに滞る」、「指導案や記録の書き

方がわからない]、「コミュニケーションがとりづらい」、
「連絡・相談・報告(ハウ・レン・ソウ)がない」と回答した割合が80%程度と高く、実習先施設での様子ともほぼ共通していた。子どもとの関係においては、「子どもの言いなりになる」、「子どものペースを考えずに自分のペースで行動する」が60%を超える回答率を示していた。

4) 最も指導が困難であったAさんとの面談は94.4%が行っていた。面談の内容は「実習での特別な配慮」(56.9%)、「資格取得」(51.6%)、「進路選択」(45.8%)などであった。Aさんとの保護者との面談については、約半数(46.9%)が実施していた。

5) Aさんの具体例とエピソードについて、「質的記述的研究法」を用いてコード化、カテゴリ化したところ、453のセグメントから、76のコード、16のカテゴリに整理・分類することができた。

本研究は、科研費(課題番号20K02663)の助成を受けて実施した。

VI 引用文献

- 浅原千里・上野千代子・若山 隆・柿本 誠(2008) 社会福祉現場実習を希望した発達障害学生への自己認知支援の実際－セルフ・エスティームを低下させない学内機関との連携のあり方－, 日本福祉大学社会福祉論集, 119, 193-207
- 安酸史子(2021) 発達障害傾向にある看護学生の支援ガイドライン(第1版)
<https://www.yasukata-b.jp/>(2022.10.1 アクセス)
- 服部伸一・井上寿美・半田 結・廣 陽子(2021) 特別な配慮を必要とする実習生に関する研究動向, 関西福祉大学研究紀要, 24, 61-68
- 廣 陽子・井上寿美・服部伸一・半田 結(2021) 気になる保育実習生の実態－養成校・実習園へのインタビューを通して－, 関西福祉大学研究紀要, 24, 21-27
- 井上寿美・服部伸一・半田 結・廣 陽子(2019) 特別な配慮を必要とする保育実習生に対する指導上の困難に関する実感調査, 大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要, 9, 15-26
- 川端奈津子(2015) 発達障害の特性をもつ学生への保育実習及び進路選択支援の検討, 明星大学通信制大学院紀要, 15, 23-25
- 北川 明編(2021) 発達障害のある看護職・看護学生支援の基本と実践, メジカルビュー

- 三澤 恵(2017) 配慮を必要とする学生の学外実習における支援体制の課題について－幼稚園教諭・保育士を目指す発達障害学生の学ぶ環境を保障するための支援体制－, 梅光学院大学論集, 50, 37-47
- 中尾幹子・田中千寿子・豊島めぐみ(2015) 看護基礎教育における学生への発達障害支援の現状, 大阪信愛女学院短期大学紀要, 49, 15-25
- 長沢修司(2016) 発達障害や精神的な困難を抱える教育実習生への指導と課題, 教師教育研究, 29, 55-59
- 二通 論(2016) 発達障害や精神的な困難を抱える学生が教育実習に取り組む際の課題と支援, 教師教育研究, 29, 33-43.
- 西村優紀美・水野 薫(2017) 実習場面での支援, 発達障害のある大学生への支援(高橋和音編), 金子書房
- 西村優紀美編著(2021) 発達のある生徒・学生へのコミュニケーション支援の実際－修学から就職後の支援まで－, 金子書房
- 大阪教育大学(2022) 障がいのある学生の教育実習における合理的配慮に関する対応マニュアルとチェックリスト
<http://www.osakakyoiku.ac.jp/~sienroom/img/manual/pdf>
(2022.10.1 アクセス)
- 佐々木祐子・八田達夫(2010) 臨地実習における学生の困難さの分析～発達障害の観点から～, 作業療法教育研究, 10(1), 15-22
- 山下知子・徳本弘子(2015) 発達障害及び発達障害の疑いのある看護学生の臨地実習における学習困難の様相, 埼玉医科大学看護学科紀要, 9(1), 11-17